

思いを伝えるために

只見小学校6年生 ゆだ もも あ 湯田 桃杏



私たち六年生は、保育所の時からずっとほぼ同じ顔ぶれで過ごしてきました。それが六年生にもなると、友達の考えていることが何となく分かるような気がしてしまい、小さなことをあえて伝えようとはしなくなっていた気がします。

しかし、去年の四月、それではないというのを思い知らされました。

それは、私の学級が六年生だけでなく五年生との複式学級になったことで実感することができました。四・五年生の時も複式学級ではあったのですが、担当する先生がもう一人いて、別々の教室で過ごすことが多かったため、言葉で伝えるという必要性をあまり感じることはありませんでした。

今年度が始まり、五・六年生のふん囲気はよいとは思いませんでした。それは、学年の友達でまとまってしまい、よそよそしさが見られたからです。

そのとき私は、去年五年生だったときに六年生との合同の授業で、六年生に遠慮して自分の考えや思いを伝えることができなかつたことを思い出しました。もしかしたら、五年生も私たちに遠慮しているのではないかと思ひ、話し合い活動や休み時間などで私からたくさん話しかければ、仲良く生活できるのではないかと考え、実行してみました。

その結果、二学期には、教室のふん囲気がとてもよくなつていききました。今では五・六年生が一緒になつて話し合つたり、休み時間を過ごしたりすることができています。そのように思いを伝えられるようになってきたよさは、授業にも表れました。

複式学級での国語や算数の授業は、五・六年生が一緒の教室で同時に行います。しかも、教える先生は、二年生なのに一人だけです。つまり先生が片方の学年を教えているときは、もう片方の学年は自分たちで授業をすすめるなければいけなくなつてしまつたということです。

初めは、自分たちだけで授業を進められるのかと、とても不安に感じたり、とまどつたりしながらも力を合わせて学習を続けてきました。

そして、二学期になつて、友達の思いに寄りそつてアドバイスをしたり、苦手なところを素直に教えてほしいと伝えたりすることができるようになつてきました。そのようにして思いを伝えることができるようになってきた私たちは、自分たちで学習を進められるようになってきたことで、以前よりも力がついてきたことを実感することができています。

言葉以外で伝える方法があることも、感じるようになりました。それは、2学期の初めに私たちの学級目標である「優顔責信」につい

て話し合つたときのことでした。

この目標には、下級生には優しく接し、学校の顔として笑顔で過ごし、責任をもつた行動をすることでみんなから信頼される学級になろうという意味があります。そんな学級になつていくか、私にはとても自信がありませんでした。私はどうしたらよいかなやんだのですが、五年生に積極的に話しかけたときのことを思い出し、まずは目標を意識して積極的に行動してみることを考えました。

例えば、休み時間に全校生で一緒に遊ぶ際、下級生が楽しめるように考えて接したり、運動委員として、全校生が安全に運動できるように校庭やボールの手入れをしたりしました。これは、言葉とちがつて、私かなぜ、そのような行動をしているのか、下級生にどう思つてほしいのか、下級生には伝わらないかもしれない。しかし、このような行動を続けられ、下級生から信頼されるようになり、学級目標のような学級になると思ひます。

この一年間、私は伝えることの大切さをたくさん実感することができました。これから只見に新しい道路ができたり、情報技術がさらに発達したりすることで、たくさんの人たちとの交流があると思ひます。だからこそ私は、これからも、言葉で、そして行動で思いを伝えることを大切にしていきたいと思ひます。

私が努力をする理由



朝日小学校6年 齋藤 寧々

世界中には、学校に行きたくても行けない子供がいるのを、皆さんは知っていますか？

なぜ学校に行けないかというところ、家が貧しくて授業料が払えなかったり、子供が働かなくてはならなかったりするからです。しかも、このような生活をしている子供の六〇%が女の子なんです。これは、SDGsの目標の、「一「貧困をなくそう」と四「質の高い教育をみんなに」、そして五「ジェンダー平等を実現しよう」が、まだまだ達成されていないということなんです。日本では、義務教育という形で六歳になれば自動的に小学校へ通うことができるようになります。教科書も無償でもらうことができます、学習のスタートが当たり前のように与えられています。

ですが、このように環境がとても恵まれているということを、私たちが実感することはあまりないと思います。私は総合的な学習の時間に、SDGsやESDのことを学ぶたびにこの不平等な現実を知り、自分が恵まれた環境にいることへの感謝の気持ちをおこらなければいけないという思いが高まりました。

私は毎日楽しく学校に通っています。今は、学校での学びをしっかりとし身につけられるように頑張っています。例えば漢字は、学校で行われる漢字グランプリに向けてたくさん練習しています。計算も、やり方がわかるだけでなく、しっかりと問題を

が解けるように練習しています。他にも、学年が上がるにつれて授業が多くなった英語は、正しい発音で話すことや、多くの単語を覚えることを頑張っています。なぜ頑張っているのかというと、小学校で習うことが一番基本になると考えているからです。

でも、学校が嫌いになったこともありました。学習が難しくなってしまうからです。そんな時に先生が、どうやったら楽しくできるか、どうやったら簡単に覚えることができるかなどと一緒に考えてくれました。他にも、私が解けない問題に当たった時に、分かるまで丁寧に教えてくれました。そのおかげで、また学校が楽しくなりました。一人一人に寄り添って、その人の気持ちを理解し、一緒によい方向へ向かっていくことができる先生という職業を素敵だと思うようになりました。今私は、学習をとっても楽しんでいきます。漢字グランプリで一位を取れた時や、ミスが多かった計算をミスしないのできた時、新しく何かを覚えてもらったときなどが最高に楽しいと感じます。スキー場で偶然出会ったニュージールランドの方と、ほんの少しでも会話ができるときはとてもうれしかったです。

私はこんなに楽しく学校で生活できているのに、他の国の子は学校にすら行けない現実があります。これはおかしいんじゃないかと思っています。

そこで私は考えました。もし、移動式の学校があれば、学校に通えない子供も学習できるのではないかな。もし全ての学校が平和で楽しい場所になれば、世界中の戦争だってなくなるのではないかな。と。全ての子供たちに学校があり、学ぶことができる。そして、学ぶ楽しさを実感できる。そんな世界で、学ぶ楽しさを伝えられたら、どんなに素晴らしいことでしょうか。

でも、私一人の力でこれらを解決することはできません。同じように考える人が一人でも多くなれば、その可能性は少しずつ高まっていくと思います。

だから私は先生になりたいです。不平等さに疑問をもち、理想の学校を実現させようとする仲間や同志をつくるために。そして、たくさんの方の言葉を、学校に行きたくても行けない子供たちに教えたいからです。そのためにも、まず自分がしっかりと様々なことを理解しなければいけません。なので、今学校でやっていることを、もっともっと頑張りたいです。例えば、いつもより一ページ多く学習するとか、ドリルを何回も繰り返しやるとか、工夫したいです。そして、みんなが楽しく学校に行けるように、学校を平和で楽しい場所にする先生を目指します。私の夢は、先生になることです。

キャプテンとして 学んだこと

ほし ゆず は
明和小学校6年生 星 柚子葉



「今年のキャプテンは柚子葉に決めた。がんばれよ」

コーチからこの言葉を聞いたとき、私の心には二つの思いが生まれました。一つはキャプテンを任されてうれしいという気持ち。もう一つは、私にキャプテンなんてできるのかなという不安な気持ちでした。私が思い描く理想のキャプテン像は、去年の『になねえ』のような存在になることです。になねえは、チームが困った時は先頭に立って引つ張るリーダーシップをもっており、場を引きしめるときにはしっかりと引きしめるといふメリハリのあるキャプテンでした。になねえがいてくれたおかげで練習もスムーズに進み、だめなこととはだめと言えるだれもがあの存在でした。「私も『になねえ』のような、みんなからしたわれるキャプテンになりたい」と思い、スタートしたものの、やはりうまくいかず、コーチからは「今まで見てきた中で一番仲が悪いチームだ」と言われるほどでした。また、チームを何とかしなくてはと思えば思うほど焦り、何をすればいいのか分からなくなり、おどおどする私の姿を見て、チームメイトから批判の声もとびました。

「キャプテンに向いてないんじゃない」「副キャプテンの方がしっかりしていてキャプテンらしいよ」と言われてしまったのです。自分でもあまりうまくいかないかと悩んでいた所だったので、この言葉を聞いて心がくずれ落ちそうでした。家でも学校でも毎日のように泣きました。今でもその時のことを思い出すと涙がこみ上げてきます。

でも、そんな時に助けてくれたのが、私の近くにいる、コーチ、お父さん、お母さん、先生です。キャプテンとしてうまくできないことを正直に話すと、「柚子葉は柚子葉のいいところがあるんだから、柚子葉じゃない」「全員にいい顔しようとしなくていいんだよ。柚子葉が思ったことを正直に言うことも大切だよ」という言葉をもらいました。私はこの言葉を聞いた瞬間、すつと肩の荷が下りたようでした。「自分なりのいいチームを作ればいいんだ」「ダメなことはダメと遠慮せずに言うことも必要なんだ」と思えたのです。さらにコーチは私のために何度もチーム全員に「キャプテンの言うことは監督の言うことだと思つて柚子葉のことを信じる」「かげ口を言うことは人として絶対にしてはいけないことだ」と声をかけてくれ、私がいりやすいような環境を作ってくれました。

そこから、何でも言い合えるような、全員が仲の良いチームへと急激に変わったわけではありませんが、少なくとも私は始めの時よりも孤独ではなく、気持ちを強くもつてキャプテンを務めることができるようになりました。

自分が思い描いた理想のキャプテン生活ではありませんでした。私は泣いたまま終わらずに、周りの人に支えられながら最後までキャプテンとしてやりきることができたのです。その最後までやりきったということに自信をもち、胸を張りたいと思います。

小学校三年生から始めたスポ少のバレーボールも十二月十九日で引退しました。バレーボールは私に、つらいことも楽しいことも、くやしいことも、うれしいことも、たくさん。の気持ちを味わわせてくれました。もしかしたら最後の一年間は泣いていた時の方が多かったかも知れませんが、ですが、キャプテンをやったことで「逃げずにやりきる大切さ」「だめなこととはだめと言う勇氣」そして「支えてくれる人の温かさ」に気がつくことができました。私の周りにはたくさんの方がいます。「柚子葉は柚子葉なりに頑張ればいい」この言葉があったからこそ、私は自分を見失わずにいることができました。そんな私に力を与えてくれた人たちをこれからも大切に、そして今度は、私の「言葉」で、困ったり、悩んだりしている人を支えられる、そんな人になりたいです。